神聖かまってちゃんが芥川賞をとる方法ーーーいちご同盟はよくわからなかった

クソ底辺

神聖かまってちゃんと芥川賞をとる方法

―――いちご同盟はよくわからなかった

冒頭から首が飛ぶ！ 銅を斬る！ 衝撃の三段斬り！ この映画を観るときは、まず最初に気持ちを整えないと最後まで観れないかもしれない？ いや、ホラー映画ではない。

たとえば、６０年代末期の映画分野は、ハチャメチャだったという。史上最高の映画時代から急速にしぼんだ映画産業にあって、５０年代の日本映画とちがい、求められたのは芸術性より興行性、かくじつに映画館へと来てくれる人たちだった。目に入ったのは、当時爆発的な勢いだった「ピンク映画」である。松竹、日活はそれに手を出した。「ピンク映画」をパクれ！と。

パクれ！パクれ！パクれ！

もういい…パクろう…。

すべてのものはパクりである。

わたしがパクったところで世界はノーダメージ。さよならバイバイ。

元ガイナックスの岡田斗司夫は「すべての物語のパターンは聖書に含まれる４７種類で尽きている」という。

アイディア王といわれたジェームス・Ｗ・ヤングは「まったく新しいものは存在しない」「アイデアとは既存の要素の新しい組み合わせ以外の何ものでもない」といっている。

さいきんは、パクりだなんだと騒ぎ出す風潮があるが、パクリは必要なのだ。

平均年齢１６歳というコピーでデビューしたアイルランド出身のバンド「ザ・ストライプス」（THE STRYPES）はインタビューでこういっている。この世界にまったく新しいものなんて無いからさ、あるものを見て《これは新しい》って言うのは自分の無知をさらしてるようなもんなんだよね。これはなるほど確かにそうだ。

神聖かまってちゃんの出現は最高だった。新しかった。ネットをとことん使っていた。彼らの場合は「出現」という表現しかない。「登場」でも「昇進」でも「浮上」でもない。だいたい若手や新人はレコード会社の宣伝広告や雑誌のピックアップ、ＣＤの売上げや、ライブハウスのライブシーンでの評判（これは地方人のわたしには分からない）から出てくる。「今度のバンドは面白そうだ」といった前評判が立ってからでてくる。

ところが神聖かまってちゃんはまったくの偶然、まったくの奇蹟で世に現れた。彼らはネットという大地をロックシーンにぶち込めばかならず何か起こると自覚的だったということは何度もの子自身語っていることだが。出れんのサマソニというインターネット投票枠でライブを行ない、ネット配信を行ない、アーカイブしていく、このあたりのエピソードはとくに有名で、すでに多くの人間が知っているだろう。

ロックバンドという形態はくりかえされてきた伝統工芸みたいなものだ。そこに何を足すかが重要だ。甲本ヒロトは「なにをやるかじゃない、どんなふうにするかなんだ」といっている。使い古されたバンドという伝統工芸に現代の若者がその時代のその感覚の何を足すかで爆発的な面

白さになるのがバンドだ。神聖かまってちゃんはネットを使った。
　しかし、それだけではここまでロックシーンにエグり入り込むことできなかっただろう。彼らにはもうひとつ新しさがあった。それは言葉である。
　最初にいってしまうが、神聖かまってちゃんは芥川賞を取るべきだ。というか、審査委員たちは芥川賞を神聖かまってちゃんにあげるべきなのだ。わけの分からないことをいっているのは承知している。
　作家の三田誠広は純文学とは何かについてこういっている。

「純文学というジャンルがあるわけではない。時代小説でも、推理小説でも、ＳＦでも、瞠目すべき深さや新しさがあれば純文学になる。純文学の「純」とは深さや新しさの度合いだと考えていただきたい。ジャンルに特化した小説の場合、そのジャンルのモノサシで作品を評価すればいいわけで、読者は「深さ」などは求めない。スタイルの新しさなどはかえって目ざわりだ。」

　わたしが芥川賞受賞作品を読んでみて、これがいいの？といつも思ってしまうのは当たり前だったのだ。なぜなら、それまで本を読んでいないからだ。だから、深さや新しさが分からない。
　たとえば、ファッションがそうだろう。ヒルナンデスでタレントが「ちょっとハズしてキメてみました！」とかいってるが意味がわからない。あのでっかいアラレちゃんメガネはアラレちゃんだから似合うのであって、女性をダサくするもの以外のなにものでもないアイテムだろうに。しかし、オシャレというのはよくわからないもので、とくに女性は自身をほどよくダサくする。でも自分が本当にダサくならないよう計算している。自分はかわいいがこのまま可愛すぎてはいけないのでダサいものを身にまとい、わたしはみんなと同じだよ？ という演出を恐らく男性ではなく女性にしているのだ。よく考えるとすごい自意識だな…。脱線したが、ファッションこそセンスや新しさを感じるために文脈を必要とする。

　新しさや深さはそのものの文脈を分かっていないと感じることはむつかしい。
　三田誠広は芥川賞でいう「新しさ」についてこういっている。

素材やテーマ、いってしまえば風俗的な新しさがあればいい。中身が新しければそれでいい。スタイル（文体）はオーソドックスなリアリズムでいい。時代は刻々と変化し、若者の生態もどんどん変化している。だから、舌を蛇みたいに切り裂いた人物が登場する小説を書けば、おおっ、新しい！となり、とべない女子高生が恋人でもないのに自分のそばにくっついているさえない男を蹴りたくなる話でも十分に新しい、アルバイトと社員の価値感のズレでもいい。そういう何げない風俗を描くのが純文学なのだ。

という。
　えー！なら、こういう話って今までなかったの？とわたしは思ってしまうのだが、いままでなかったのだ。あるかもしれないけど、そこは歴史に選ばれたものとそうでないものということで置いておく。

さらに三田誠広はこう語る。推理小説とはちがい、平凡な人生の断片、凶器もトリックも真相もない小説のどこにスリルやサスペンスがあるのか、そもそも犯人は誰なんだと叫びたくなるほど何のために書かれた小説なのかわからないというのが、純文学の特質だ。

たしかにわたしは中学生のとき綿矢りさの『蹴りたい背中』を読んだとき「ファ！？」となった。それまで小説なんてまともに読んだことのないにんげんが作者が１９歳だがで芥川賞とったという話題にのって、その作品を読んでも分かるわけがないのだが（いまなら、中学生は児童文学できるだけ読んどきなよと思えるのだが、当時の背伸び感よ…）、読んで思った感想が「これ話なんだったんだ…？」感である。退屈をかんじている女子高生の日常にちいさい波並がちょこんとたつ程度の出来事をみせられて、ちょっと、わけがわからなかった。まさに三田がいうとことのこれは一体何のために書かれたのだ…！である。

三田誠広のことばを続けよう。「推理小説はしょせん作り物の話でしかない。犯人が分かり、本を閉じてしまえば、スリルもサスペンスもたちどころに消え失せてしまう。純文学が描き出す世界は、わたしたちが生きている子の現実社会とつながっている。苦しみもがいている若者がいるとして、彼を苦しめている犯人はどこにいるのかといえば、この現実社会そのものが犯人だというしかない。だからこそ純文学は本を閉じてもサスペンスが長く尾をひく、とてもスリリングな作品なのだ。」

さらにこう言う。「新しさ」だけではその作品は長くもたない。もたせるには「深さ」が必要だという。

神聖かまってちゃんはインターネットをつかう新しさがあった。しかし、それ以上に楽曲の良さがあった。深さがあったのだ。歌詞には《ニート》《死》《孤独》《絶望》な要素があって、それがただの一過性のものではなく、日常にそれが浸透しきっている様子が描かれている。というか、描いてもない。ただ、感じるのだ、絶望を。

昨今は、音楽フェスが増えて、「アッパーであろう！」という空気がロックシーンでも日本社会でもまんえんしている。わたしのようなひねくれものはなんだかそれちがうんじゃないの？という気もしているし、人がアッパー感を必要としている空気がまるで絶望の裏返しのような気もしているのだ。

それを言ってくれるのが神聖かまってちゃんだった。わたしたちの世代にとって絶望はまず標準装備。そこからさらに絶望するか、もしくは何かのひょうしにすこし上がるか、である。現代のふわふわした絶望感のまんえんする世界の話を子は描いている。彼らの深さだ。それによってかれらは「新しさ」だけでない「深さ」の強度をもつ。

純文学が何げない風俗、現代の生きる人々を描くものだとしているなら、神聖かまってちゃんほどそれに当てはまるものはいまないだろうと思うのだ。さらに斬新さ強烈さということもいれるなら芥川賞だっていれてよかった。←